

# 伊香具マップ (賤ヶ岳周辺)



伊香山野辺に咲きたる萩見れば  
君が家なる尾花し思ほ中

笠金村(万葉集)



## 伊香具神社

「伊香」と書いて古くは「いかご」あるいは「いかぐ」と呼ばれてきました

また、天女の羽衣伝説（白鳥伝説）が伝わっており、天女を妻にした伊香刀美（いかとみ）という人物の物語が残されています。伊香具神社の祭神伊香津臣命（いかつおみのみこと）はこの人物であり、のちに伊香地方で栄えた豪族「伊香連」の先祖だと言われています。また余呉には、天女を妻にした桐畑大夫の話があり、天女が産んだ子どもが長じて菅原道真になったという伝説が残されています。

## 賤ヶ岳の合戦

天正10年（1582）本能寺の変で没した織田信長の後継者を争った、羽柴秀吉と柴田勝家の戦い。天正11年3月、両軍は山中に多くの砦を築き対峙しました。4月、織田信孝らを討つため岐阜へ出陣した秀吉の際に乗じて、勝家の家臣佐久間盛政が中川清秀の守る大岩山へ奇襲をしかけ、成功。

柴田軍が優位に立ちました。しかし、秀吉が大垣から52kmをわずか5時間で戻り（美濃の大返し）のちに七本槍と呼ばれる若武者たちの活躍で、秀吉軍の勝利に終わりました。

この合戦を機に、秀吉は天下取りへ大きく飛躍することになりました。



## 賤の恋

昔、高月町唐川に由留伎（ゆるぎ）という青年が住んでいました。由留伎が狩りに出かける時の姿はほんとうにりりしく立派でした。あるとき、余呉の里の賤（しず）という娘が、由留伎に恋焦がれ、その思いを打ち明けることもできないまま、とうとう亡くなってしまいました。

するとその夜、突如として大きな地鳴りと激しい雷雨が起こりました。余呉の里は湖となり、唐川の里は地面が隆起して山となりました。人々は、この湖を余呉湖、山を由留伎山（今の湧出山）と呼ぶようになりました。

ところが、由留伎山は、余呉湖から流れる水をせき止めてしまったため、もう一つ、伊香胡（いかこ）という湖ができてしまいました。この湖には一匹の大きな大蛇が住み、由留伎山のふもとに、まるで山を恋慕うように住んでいたということです。この大蛇は賤の化身であると里の人々は恐れしました。

ある日弘法大師が来られ、かわいそうな賤のために、ねんごろに供養され、大蛇を山のふもとに葬られたということです。それでこの山を「賤ヶ岳」と呼ぶようになりました。

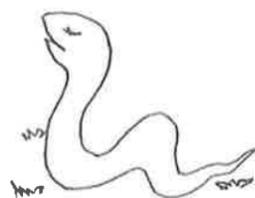
山のふもとに今も伝わる独鈷水は、独鈷をもって大地をうがち、賤をねんごろに葬ったところと

言われています。

また、弘法大師は、伊香胡の一部を切り取られて湖水を流したので、伊香胡の湖は陸地になり、伊香具村ができました。

弘法大師の堀切として今も伝わっています。

湖北昔話  
—むかしばなし水めぐり—より



## 猿の馬場と白池

今も、北山の尾根の中腹に小さな平地があり、猿の馬場と呼んでいます。そして、その山の麓にきれいな湧き水をたたえた白池があります。

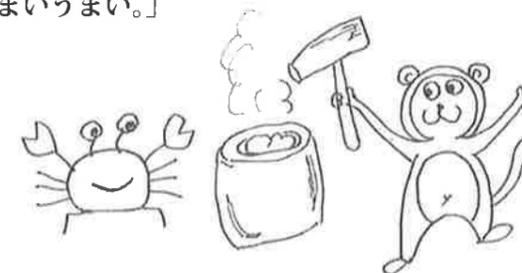
むかし、山の峰から降りてきた大きな猿と麓の小池から登ってきた小さなかにが、山の中腹にある小さな平地で出会いました。そして、餅をついて食べようという話がまとまりました。

そこで、大きな猿とかには、力を合わせてペタンコペタンコと餅をつき始め、やがて、うまさうな餅がつきあがりました。

ずるがしこい猿は、自分ひとりで食べようと欲をおこし、「この白を下の方へ転がして、先に着いた者が食べよう。」と言い終わるや、その餅の入った白を突き転がし、白を追っていちもくさんにとび降りていきました。

かには、しかたなくその後を追ってよちよちと降りていきました。少し降りていくと、なんとつつじの木株に白といっしょに落ちていったはずの餅が湯気をたてながら引っかかっていたのです。

かには、喜んで、「さがるはたから、こし召そか。」  
「だりるはたから、こし召そか。」  
「ああ、うまいうまい。」



と、舌つづみをうって、全部食べてしまいました。

一方、猿は白を追っかけて降りたが、白は麓の小池に転がり落ちてしまい、その白の中には、餅はありませんでした。

がっかりした猿は、しばらくは気をうしなっていたが、やがて気を取り戻して、餅を追ってきた道を探し求めて登って行ったそうです。

こんなことから、今でもこの山のつつじの葉にはかにかが食い残した餅のあとが残っているといます。

そして、山の麓の白池の中央には、古い白が沈んでいるそうです。

きのもとのむかし話より